

上前智祐展 2019年7月18日～10月31日 軽井沢ニューアートミュージアム

上前智祐展 2019年7月26日～8月31日 銀座ホワイトストーンギャラリー

「上前日記—上前智祐と具体」出版 2019年12月15日

上前智祐「具体」解散後の展開（1973～2018）

—縫い、マッチ、オガクズ、モリアゲ、四角い輪、格子、金と銀、版画—

泡立つアイデアの刻印—不滅の墓標としての作品

画家、上前智祐は、2018年4月16日、97歳で没した。私も訃報は聞いたが、葬儀や告別式は家族、近親者のみによって行われたので私も出席せず、次男の祐二さん宛てにご香典を送ったのみであった。

1999年に現美センターで開催した回顧展では、92年までの作品に限定すると同時に、また、四角い輪模様や墨画、版画作品についても、92年時点で既に制作されてはいたが、その評価と展開については、もう少し待つ必要があると思い、選定から外していた。

それゆえ、70～90歳代の晩年の作品は、大阪府の収蔵作品になっていない。

そして私は、作品よりも上前日記全冊の読破とデータ入力、出版に向けてエネルギーを注ぎ、2019年12月にその出版にこぎつけた。

並行して、冒頭に記したように、2019年7月～10月にかけて銀座と軽井沢での展覧会話がもちあがり、ホワイトストーンギャラリーと軽井沢ニューアートミュージアム、上前智祐記念財団、オフィス・アダージオらにより、軽井沢と銀座で上前智祐展が開催されることになり、私にその企画構成がゆだねられた。

それらの展覧会では、大阪府のコレクションも出品されたが、それ以外に上前財団、ホワイトストーンのコレクションもあわせて展示され、あらためて大阪府所蔵作品以外の上前智祐の作品を見直すことができた。そこには、上前が晩年に繰り返し描いた四角い輪のシリーズ、ミクストメディアと呼ばれるモリアゲのオブジェ、モリアゲの格子作品、金と銀の作品、多彩な版画作品などが出品された。（別紙図版参照）

「上前智祐—集合と稠密のコスモロジー展」（1999.2.16～26）が大阪府立現代美術センターで開催された時、上前智祐は79歳であった。それ以降の上前に関する主要な動きをまとめておこう。

1999.11 兵庫県文化賞受賞

2008.9.13～10.26 和歌山県立近代美術館、上前智祐・山中嘉一・坪田政彦展

2012.10 Painting the Void 「空・無を描く」ロサンゼルス現代美術館、ポール・シンメル企画による展覧会が開催され、上前の作品が白髪、嶋本とともに選定される。

2012.11.3～12.24 2013.1.5～2.17 BBプラザ美術館（神戸）、卒寿を超えて「上前智祐の自画道」展

2013.3.2～23 N.Y.グッゲンハイム美術館 『具体』素晴らしい遊び場

2014.10.4～26 京丹後市 丹後の前衛、小牧源太郎・上前智祐展

2015.5.16～6.12 香港のホワイトストーンでの上前智祐展

2018.4.16 上前智祐没 享年97歳

2019.7～10 軽井沢と銀座での上前智祐展開催

2019.12 「上前日記—上前智祐と具体」出版

軽井沢と銀座での「上前智祐展」出品作品の選定と展示構成は、次男の祐二さんの意見を取入れつつ、基本計画は私が行い、実際の現場での展示は、enocoの河崎由香子、上前祐二、西脇保子、軽井沢ニュー

アートミュージアム、銀座ホワイトストーンのスタッフらが行った。軽井沢展では、府のコレクション以外に、四角い輪模様作品四点、モリアゲなどミクスト・メディア作品四点、自画像一点、組版画六点を展示、銀座展では、1~6階(4階を除く)の各階フロアーに、それぞれテーマを決めて下記のように展示構成した。

- 1階 四角の部屋(四角の輪模様のシリーズで統一する)
- 2階 黒の部屋(黒い作品で統一する)
- 3階 青の部屋(青い作品で統一するが、小部屋は別の作品)
- 5階 格子／金と銀の部屋(黄色と緑の格子作品、金と銀の作品)
- 6階 特別展示 大阪府二〇世紀美術コレクション(大阪府所蔵作品)

「縫い」の作品について 1975年8月21日~

「上前日記」によれば、上前が「縫い」を、始めたのは1975年8月21日からである。そして「縫い」について、上前は、自身が記したさまざまな文章の中で詳細に語っている。^{※1}

それらによると、「縫い」は、黒い「セン」の油彩画の延長として制作されるようになった。油彩画の大作は、油絵具代が高くつく。そんな時、回りを見渡すと、家の中に古いシャツなど、ぼろ布がいっぱい余っていた。それらを挟みで切って、継ぎ合わせ、平面的に縫い合わせていくという造形手法を思いついた。農民たちの仕事着である野良着の「継ぎはぎ」。それらは古い布を重ねて、縫い合わせて、強化し、古びて擦り切れた部分には更に新しい布を当てて補強し、長期にわたって使用されてきた。^{※2}そこには貧しくとも「生きる」という「執念」があり、そのことに感動することから、上前の「縫い」が始まったともいえる。^{※3}「油絵具も繊維も物質に変わらない」そう思ったとき、上前の眼前に、自ら着古したレインコート地があった。

若い頃、彼が中村美術京染店に丁稚奉公している時にさせられた「仮縫い」「は縫い」の作業が、誰よりも早いと褒められたことがあるという。また、「神戸製鋼所」のクレーンマンとして働いていた時には、クレーン掃除のために1週間か10日おきに配布されるウエスと呼ばれるボロ布が、自分にとってはまるで宝物のように思えたという。

「ウエスについては、新品同様のものから継ぎはぎだらけの労働着まで千差万別です。色彩、布地についても同様です。紅絹(モミ)もあれば柔道着もあります。女性の下着も外出着も多くいろいろ雑多です。これらのボロはみな、洗って清潔で、ハサミの切れ目がはいっています。このウエスは、どこの百貨店でも、生地店でも見るのできないものです。それを僕がみるところは、クレンのデッキです。目につくそのあたりは、固い鉄ばかりです。そんな中でみる〈ウエスは〉ボロ布といえども輝いています。」^{※4}

そのような記憶と経験が、上前を「縫い」に向かわせた。

一針、一針、糸を布に通してゆく、果てしなく、気の遠くなるような作業、あるときはぼろきれを利用し、その繰り返しの作業で、あるときは指を突き刺し、指や手首、腕や首や肩を痛めながらも、延々とその作業が繰り返される。布と糸と針と上前とによる、時間をかけた格闘によって、その「縫い」の作品が生まれる。ペインティング(painting)の絵画ではない、スティッチング(stitching)の絵画である。布と糸を用いているが、それは染織ではない、ファイバーアートといわれるような現代的な織物でもない、タピスリーでもない。まさしく「縫い」(NUI)としか言いようのない、上前独自の美術造形であり、絵画的平面作品である。

「縫いの作業をしている時の指先は何ものかに追われて逃げるのに、命がけて去っていく虫のように感

^{※1} 上前智祐 「縫い」の作品について 2005年2月、上前智祐「現代美術一僕の場合」1988年

^{※2} 同前 ある人への返書 63頁

^{※3} 同前 孤立の道 108~109頁

^{※4} 同前 ある人への返書 95頁

じられる。正座をして、針は大きくけか、フトン針を用いて、親指と人指し指にゴムのサックを嵌め、中指と薬指には指貫きをして、薬指にはその上からテープを巻いて、小指にもテープを巻いて、五本指すべて武装した。」^{※5}

と語り、「縫い」では「かのご縫い」の手法を中心に据えたという。

「縫い」の作品は、図版や写真などでは、その作品の細部や質感(テクスチャー)などは全くと言っていいほどわからない。その実際の作品を見て、はじめて、その作品の模様が一針、一針、縫われたものであることを発見したときの私たちの驚きは尋常ではない。そしてそれが立体オブジェにもなっている。

以下、「上前日記」から「縫い」に関わる部分をピックアップしておこう。

1978.4.5 「今度の作品は3×2mの黒布であったが、赤糸で縫い上げて壁に広げて押しピンでつけて見ると、作品の部分(糸で縫われたところ)縮んだままで 270×116 cm。使用した赤の綿糸はオリンパスエミーグランド 50g玉 15 個以上。この作品はアーティストユニオンの奈良展(5.9~14) 出品の予定。」

1979.3.5 「薬指に指抜きを嵌めてフトン針で、ひざの上で張った布を縫っているのだが二重になった生地のところ針の頭が指抜きから外れず、縫いの勢い余ったその反動で小指を深く突きさして、えぐれたようになり出血したが、今朝もその血とまらず(昨日の負傷)。」

1979.9.23 「制作は枠に張って何度も見る。又これと同じような前の作品と見くらべたりしているが、前のは赤布に黒糸で縫い詰め、その上から赤糸で縫い詰めたものだが、今度のは白布に前と同じように黒糸、赤糸を縫い重ねたものなのだが、その縫い残こされた4つの端が、前のと今度のとでは赤と白の違いなのだ。これが共に赤い台布(?)に縫いつけられているが、前のは赤の台布に作品の赤の縁だからすっきりしていたが、今度のは作品の縁は白になっているから、これが余りにも目についてならない。それを今日も縫いつぶしている。」

1980.9.5 「昨日まで続けていた縫の作品(3×2m)の作品とアートナウ80展に出品した縫の作品(2.7×1.9m)を今度ユニオンの大阪展に出品するのだが、2.7×1.9 は美術館で包装されたのを解いて木枠から外して尚、縁の白い布もと外して、これらの作品は展示には棒で吊り下げられるようにする、そのため木の棒(胴打ちで)準備する、この木の棒は運ぶのに便利を計って、短くなるように2ツ継なぎになるようにする、又この棒を入れるために作品は布を管縫いしておく。」

「マッチの軸」の作品について 1959年2月4日～

マッチの軸が最初に登場するのは 59年2月4日。まだ「具体」の時代である。白ペンキに壁塗り用粉末を入れ、オガ屑と一緒にマッチ棒を入れてかき混ぜた。マッチ棒の作品には、のりで溶いたススを塗ったり、紙粘土を黒くして塗ったり、ペン粕(=ペンキの粕のことか)を買って、ラッカーやニカリでマッチの軸を貼り付け、ノリをたいて、そのノリでオガクズをキャンバスにつけたりした。

マッチについては、近所のマッチ工場に勤めているおばあさんにマッチ工場の場所やとマッチのことにして色々尋ね、マッチの軸は、神戸の扇港マッチと藤沢マッチの両方の工場に行き行って売ってもらい、またある時は、単車で魚住へマッチ工場をさがして、明石王子町でマッチの軸を注文したこともある。

^{※5} 上前智祐「縫い」の作品について 107頁

(以下「上前日記」より)

1972.11.14 「一斗缶入りの白の水性ペンキで、マッチの軸を 183×138 のパネル二枚に定着させるのに全部使用。マッチの軸は古新聞紙をまるめて、その上からペンキにしたしたマッチの軸を被いかぶせるようにして、後で古新聞紙を抜きとって空洞になるようにしている。」

1973.8.7 「薄めたボンド液にオガクズとマッチの軸を交ぜてねって立体の小品をつくる」

1979.10.22 「和壁というのも買って来ているが、これも未だ使用したことがないのでどうかと思う。一応洗面器一杯分ののりでマッチの軸をつける。」

1979.10.23 「ねばつく黒ペンキの中へ素手を突込んで行く。このペンキ、ボイル油、シンナー等を用いる。黒ペンキは船腹に塗る塗料のこと。オガくずのないのが残念。先日買ったメリケン粉、和壁を使用。」

1979.12.17 「マッチ軸 220×175 の作品制作には、黒ペンキ等を大量に使用することを予期して 14 kgもの黒ペンキを買ってきたが、やはり内側を赤にした方がよいと思う。」

「モリアゲ」の作品について

オガクズやマッチの軸を固めて、盛り上げて、段ボール、桂の輪切り、牛乳パック、缶ビール、などをシンにして、壁土、石膏、漆喰などを混ぜて盛り上げ、油彩などで彩色したオブジェ作品を制作、それを上前は「モリアゲ」と呼んでいた。枯葉、エアーキャップを支持体にしたものもあり、オガクズは、作家仲間の椿崎に送ってもらっていた。軽井沢と銀座の展覧会では、両会場で、青く彩色されたモリアゲ作品(オブジェ)が出品されている。

(以下「上前日記」より)

1979.11.21 「先日買ったスピレの緑は色がうすいので黒ペンに交ぜて使用、缶に穴けると色が吹き出して騒動。今日もペンキを塗るところまでいかず。ペンキにボイル油、シナ油などにオガクズやマッチの軸を交入して画面に盛り上げたり、又盛り上がっているところを取除いたり、絵の方も布が二重になったところをやっているので針に力がある。(肩凝りはこのためにもよる)(後略)」

1995.8.5 「黒の立体作品にも手かける、黒いオガクズを盛り上げる、その四つある中の二つは一つに結合する、(中略)盛り上げると言っても泥の様なものをつけるのだから上になる部分しか手を加えることは出来ない。」

2002.3.18 「モリアゲはダンボールの四角形をシンにしたため、ふくらんだりしたため糸によって手直しするため時間かかる。」

2002.5.30 (モリアゲ作品など、制作方法の詳細が記載されている)

2003.5.7 「桂の輪切り 16 枚にモリアゲた壁土を使用(石膏も)、この壁土は砂利用になっているため大きいのはくだいて、スイノウでこして使用」

2006.10.5 「今日一応仕上がった青のオブジェは 7 点、これらの作、気になるのは小さな無数の穴、地塗でその穴に絵具が入ってないこと、(後略)」

2007.4.26 「椿崎から、僕が送った箱のオブジェに 2 万円の金も添えていたが、電話で作品は素晴らしいという、家の宝として残すという、そして 2 万円は返すという、オガ屑はいくらでも送るとのこと」

2007.4 「(制作)、特に今日のモリアゲ前の骨格(組合わせ)は小さな穴に糸を通すのに難儀だが、やはりしっかりと組立ないとモリアゲてからも、また絵具(シツクイも)を塗ってからもその作品を扱うのに危ない」

2007.8.14 「(制作)今、塗料と油絵具、シンナーで溶くのだが、この時しっくいを多くまぜているが、この頃のは少し様子がちがうと思っていたら石膏であった。この石膏は何年も前に藤野が壁土と共に送ってき

たものであることを思い出す。モリアゲには牛乳パックの四角九ツをならべたもの、また地の紙色が見えるところがあって、それらをふさぐなど。」

2007.8.15 「(制作)シンナーの缶3つつぶしてしばって固定する、牛乳パックの空箱四角 9 つに地塗り青」

2007.10.3 「(制作)大きな四角はダンボールでできたもの、16×19 高さは 13 この大きな箱は四つ積み上げるのだが、その中の一つの小さな箱をすみに当るところにひっつけているのだが……(後、制作過程の記述が続く)」

2007.10.6 「ダンボールの箱から青のモリアゲ 19×19×高さ 42 センチ、四ツ重ね、その中に四角の小さい四角の小さいのをくっつけている、また 19×16、高さ 12 センチ、その中にも小さい箱がくっつけている」

2007.10.14 「作品、エアパック(エアキャップのこと)に青のモリつけしたのを、無理にはがすと、へこんだところとモリつけがついたままのところが出来て面白い作品となる」

2007.11.19 「(制作)青のモリアゲは今までのうちで大作と思うのに手掛けている、それには仮の足場(立てて直接作品の一部が地面に触れないように)を作ったり、個々の四角の形(牛乳パックによる)ものを、一応枠内(枠も作品の一部に固定していくための紐(ステンの番線や糸)をつけることなど)をつけてモリアゲにはそれら見えなくする)」

2007.12.27 「椿崎にオガクズの注文、手紙を出してまた電話すると、明日着くようにするとのこと」

2007.12.28 「朝に、ダンボール箱で持ち上げるのがやっとというのが届く、これでまたおきなく作品ができる」

2008.1.13 「青のモリアゲ材料(ドロ)、洗面器に3杯半作る」

2008.2.21 「今日から青のモリアゲ再開、エアマット(エアキャップのことか、編者)のフロッターजूー応うまいった様だ、20 号キャンバスに新しく作る」

2008.6.14 「青のモリアゲで枯葉の作品、明日には完」

2008.10.2 「青のモリアゲ材料づくりに素手で行う」

2009.2.8 「祐二、僕は作品(青のモリアゲ油仕上げの立体とレリーフ 3 点)、それぞれの箱入れるのだが、そのうちの1点は枯葉をモリアゲたもので、その一部が高くそったのがあって箱入れには、その仕かけに手間どる。」

2009.4.30 「青のモリアゲ材料作、洗面器で7 杯分」

2009.7.12 「青のモリアゲ材作り、洗面器 9 杯分」

2009.10.14 「(制作)青のモリアゲで小さい缶ビールの空いたものをつなぎ合わせている、曲げ方に工夫、乾きがずっとおそくなった、仕上がる作品も何点もあるのだが、牛乳の空き箱にも手を入れている」

2009.12.23 「青のモリアゲ材料に手入れ、洗面器 4 杯分」

2010.7.29 「モリアゲの制作は、8 号と 10 号の 2 点は青のモリアゲで平塗したものだが、それを油性の赤ペンキで地塗りするのだが、青の地塗(モリアゲで平にしたもの)には油性がなかなかなじまず、油性赤ペンもなかなか塗りがたく、多くペンキも油もシンナーも、これ程費やすとは……」

2010.8.5 「モリアゲ材料づくり、洗面器に7 杯分」

2010.8.12 「椿崎よりオガクズ箱送ってくる」

「四角い輪模様」の絵画について

「太い枠で囲んだ小さく曖昧な形の四角」(日経アート 1995.11)、あるいは「アマーバーのようなリング

によるバリエーション」(アート・トップ 1995)といった表現が、展覧会評の中に見られるように、この作品が登場するのは1995年頃になってからである。

しかしながら、それより37年前の1958年の120号のグレーの「作品(灰色)」(大阪府所蔵)にも、また1960年の油彩画にも、その原初的な形が5個程度すでに現れている事に注意しておく必要があるかもしれない。

私は99年の上前展の時点で、既に90年代に入って制作されるようになったこうした作品を見ていたが、その時は、それらの作品にあまり感心せず、出品作品から除外した。それ以前の時間が凝縮したような密度の濃い作品と比べると、求心力やエネルギーが抜け落ちてしまっているような気がしたからだ。上前は、晩年、唐突とも言えるような、なぜこの四角い輪模様にこだわりを見せるようになったのだろうか？加藤瑞穂氏も、そのことを気になっていたようで、ある時私に「上前氏の生前に直接聞いて、確かめておけば良かった」と言っていたが、私も今ではそう思っている。

「上前日記」には、この四角模様の作品については全くといっていいほど触れられていないが、ただ一か所だけ、1998年11月22日の日記にフランスのシュポール・シュルアスの作家、クロード・ヴィアラに言及した箇所がある。

「20世紀美術の流れ」を見ていると、クロード・ヴィアラが、僕がこれから変わろうとする作品に似たことが一寸感じられるが……。という箇所である。このひと言が、上前のこれらの作品解釈のヒントになっているのかもしれない。

「格子のモリアゲ(黄と緑)」、「金と銀」の作品について

銀座のホワイトストーンの上前展の5階フロアーを、私は、黄色と緑の格子作品、金と銀の作品でまとめことにした。

いずれもこれまでほとんど展示紹介されていなかった作品である。とりわけ、金と銀の作品は、上前の晩年の新境地が垣間見えるような気がした。これらは、約7センチ四方の正方形の金、銀のプレートをびっしりと画面いっぱいに敷き詰めた作品である。それまで上前は、金色や銀色を使ったことは一切なかった。金色のプレートには、やや白錆が目立っていて、本来であれば錆落としをする必要もあったが、この2点を左右に並べて展示することが必要と思われた。

また、格子の作品についても、他にあまり作例がなく、黄色と緑の格子作品は、モリアゲ手法がほどこされ、色彩もよく出ており、完成度の高い作品として選定した。

「墨画」と「版画」、「和製ジャンクアート」

1999年、現美センターに出品された作品61点すべてを、大阪府は3千万円で購入+寄贈で収集したが、収集した作品の中には、墨画の冊子や食パンの包装紙で制作されたインスタレーション(吊り下げ)作品も含まれている。その時に入ったお金を、上前はすべてその後の版画研究に費やしたと私に語っている。上前日記にも、1999年10月9日、「この頃版画を始めている」と記されている。その後、日記には迫畑工房(シルクスクリーン)、オリエント工房、酒井工房(銅版画)、中村工房(銅版画)(2005.7.17)、ちとせ工房(2005.11.12)などの版画工房とのやりとりが記されている。その中で、上前は、迫畑や酒井の工房が気に入っていたようである。その後、2007年に大阪府は上前氏本人から187点の版画の寄贈を受けている。

また、上前は食パンの包装紙のような、身近な廃品を用いた作品なども色々と試している。

(上前日記より)

1974.8.11 「6月頃から食べた後の食パンの袋、食べたリンゴのタネ、食べたチーズの包み紙、箱など、物を買った包み紙、メモした紙片、トイレットにいつ後始末した紙、ビールの王冠、その日に読んだところの新聞の切抜き、使用済みのティーパックに日付記入したもの | 年分、ピーナツの薄皮 | 年分の袋詰め、その他、なんでも残せるものは残すようにしている。これらを | 年以上続けて作品として発表したいと考えている。そして日記にはこれらの制作時間は記入しない。」

これらの廃品は、一度信濃橋画廊で発表されているが、いずれも作品としては必ずしも成功しているとはいいがたい。しかし、その中で「食パンの袋」を使って制作された作品は、食パンの会社名や製品名のロゴの色彩が集合することによって、一つの美しい模様が生まれており、「和製ジャンクアート」としては、まずまずの完成度にあるといえよう

上前智祐の作品の本質と核心

上前の作品を言葉で表現することは難しい。吉原治良が、かつてグタイピナコテカでの上前の個展のパンフレットに推薦文を書く際に、上前に向かって「君の(作品について書くのは)はなかなか難しい」と繰り返し述べているが、実際そのとおりである。それは何故かという、作品そのものに、言葉に変換する手がかりが、極めて少ないからである。上前の経歴や環境、境遇、エピソード、日々の暮らし、について、語ることは山のようにある。しかしながら、作品そのものは、一見したところいずれも変化に乏しく、写真や図版ではなく、実際に生の作品を前にして、じっくりと時間をかけて鑑賞しないと、嶋本が指摘したように「すべてが同じに見えてしまう」からである。それゆえ、その作品を語るには、どうしてもその作品の本質や核心に触れなくてはならない。技術的な方法論や、表面的な変化に触れただけでは、上前作品を語ったことにならない。そうしたことは上前智祐の作品に限らないのかもしれない。私たちは、作品を語っているようで、実際には作品の周辺を撫でまわして、作品を語っているつもりでいるだけの場合が多いのかもしれない。その時、私たちは、いったい「作品とは何か」という根本的な命題に立ち戻ることになる。

上前作品の本質、核心とは、果たして何か？ そのようなことを考えながら、上前の著述に眼を通していた時に、次のような上前の一文が目に入ったので、それを書き止めることにした。

「僕の頭には、強い劣等感と、確固たる優越感とが、気圧の様に流動している。そして、これ迄の経験によって培われてきた脳みそからは、酵素が発酵して、いろんなイメージ(アイデアともいうべきか)が次から次へと泡立っているのである。そして又、どんなコンピュータよりも以上に、万能的に訓練されてきたこの10本の指は、脳から神経をへたイメージを、選ばれた素材に刻みつけるのである。この刻印されたものは、最早ただの物質ではなく、その時の作家(僕)の、呼吸する息のこめられた永久不滅の僕の像(墓標)なのである。」^{※6}

上前は、日記をはじめ、かなりの数の文章を出版物として残しており、作品とともに、膨大な資料があって、上前研究の材料には事欠かない。しかし、上前作品の本質を語っているものはそれほど多くはない。その中で、この一文は、かなり上前作品(芸術)の本質、核心に迫っているのではないかと思われる。

人はみな、この世に生まれ、生きてきた証、存在を何らかの形で、この世に残したいという欲望がある。それは、人によってさまざまである。動物的な本能という意味では、それは、第一義的には自分のDNAを後世に引き継ぐこと。子孫である子供や孫を次世代に残すということになるのかもしれない。社会的存在という意味では、仕事、業績、功績、勲功、地位、名誉、お金、家、財産、資産、後継者……。その中で、芸術家、美術家は、「美」という普通、世間では普遍的な価値と思われているものを求めて、様々な知識、技法を駆使し、何らかの物質に、その価値を転換させようとする。美的価値の物質化という終わりなき、果てしなき作業で

^{※6} 上前智祐 現代美術一僕の場合 挿入パンフ 今度の出版に当って 1988年5月13日より

ある。上前もまたそういった業にとりつかれた一人であった。

それを上前は、「経験によって培われてきた脳みそからは、酵素が発酵して、いろんなイメージ(アイデアともいべきか)が次から次へと泡立っている。」と表現し、「万能的に訓練されてきたこの 10 本の指は、脳から神経をへたイメージを、選ばれた素材に刻みつけるのである。」そして、「この刻印されたものは、最早ただの物質ではなく、その時の作家(僕)の、呼吸する息のこめられた永久不滅の僕の像(墓標)なのである。」と語ったのである。

そのとき、上前作品の技術的、表面的、形式的な側面は、一旦、脇に追いやられ、一瞬姿を消す。上前智祐という人間の生きているという息遣いと心(精神)が、そこ(作品=物質)に宿っているのかどうか、そこから伝わるのかどうか、作品にとって最も重要な価値となる。上前のいう、「呼吸する息のこめられた永久不滅の自分の墓標」である。この墓標こそ、上前智祐の作品の核心部分であり、本質であると言えるのではなかろうか。

『『美術／漂流』V(第3巻) 学芸員Nの軌跡』中塚宏行 編・著 2021年
第3章 もうひとつの「具体」所収

(別紙)

「上前智祐展」展示風景 (2019年7月26日～8月31日、銀座ホワイトストーンギャラリー)



1F 格子 (左) と四角の輪模様 (右)



1F 黒灰の四角の輪模様



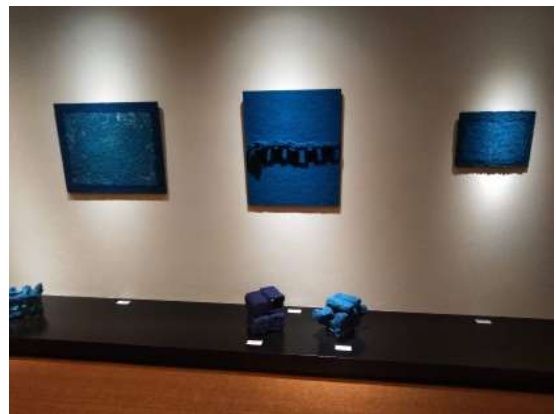
1F 四角の輪模様



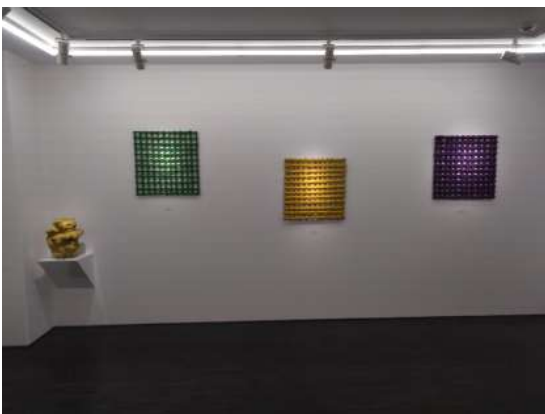
2F 黒の部屋 (四角の輪模様も)



2F 黒の部屋 (縫いとオブジェ)



3F 青の部屋 モリアゲ



5F 格子とオブジェ



5F 金と銀の作品